

ハイデルベルク信仰問答より

問 87 感謝もせず、悔改めもしない生活から離れて、神に立ち帰らない者は、救われることはできないのですか。

答え 確かに、救われることはありません。「不正な者は、決して、神の国をつぐことはない。間違っ
てはいけない。姦淫をする者、偶像礼拝する者、不義な関係や同性愛という倒錯の罪を犯す者、盗む者、強欲な者、悪口を言う者、偽り者は、誰でも神の国をつぐことはない」(I
コリント 6:9-10) と聖書は言っているのであります。

問 86 では、キリスト者が「良い業」を行なう理由について教えられていました。恵みによって救われた人は、キリストの似姿に造り変えられた結果として感謝を表す人生を歩み始めるのです。

問 87 では、救われたはずの人が感謝もなく悔い改めもない生活が続けることの問題点が指摘されています。ただここで、やや誤解を招きかねない表現が使われている点を見落とすことはできないでしょう。「…神に立ち帰らない者は、救われることはできないのですか」と言われると、その人がまだ救われていない状態にあるように聞こえてしまいますが、話の流れではキリスト者となった人の生活のことが言われているはずで
す。つまり、キリスト者にふさわしくない生活を継続すること (I コリント 6:9-10) は、その人が実は救われていないのではないかという疑念を仲間のキリスト者にも覚えさせるし、本人も確信を失っていくということでしょう。もし最後まで信仰を全うできないのであれば、論理的にはその人は最初から救われてはいなかったということになります。救いの約束は変わらないのであり、主は契約に忠実であられます。

以上のことを前提として、神が憎まれる生活が続けることの問題点をもう一度考えてみましょう。キリスト者であるならば、聖霊による内的照明によって、罪の内を歩み続けることはありません。何度失敗しても罪を悔い改め、主に立ち返っていくのです。しかし、罪が常習化し、それを悪いとも思わず、誰かが指摘してくれてもその声を無視し続けるならば、その人は危険な状態にあるでしょう。そのままの状態に留まり続け、主と教会から離れ、信仰とは無縁の生活のまま人生の終わりを迎えたとするならば、その人は残念ながら元よりキリスト者ではなかったのかもしれない

今日の問いでは、キリスト者の聖化の歩みは「感謝」「悔い改め」「立ち帰り」の継続だと言われています。救われた人は完全に罪を犯さなくなるということではありませんが、まわりつ
く罪を日々捨てる力が与えられるのです。その力を与えてくださるのは聖霊です。この聖めの道筋を歩んでいることが自覚できるとき、キリスト者としての人生が導かれていることを確信できるよ
うになってくるでしょう。